

信念の共同体 —高等学校応援団に関する人類学的研究

後藤千尋

1. はじめに

本研究の目的は、高等学校における応援団活動の実態を、文献調査とフィールドワークによって明らかにすることである。応援団は、日本のスポーツにはなくてはならないものであり、親しみ深い娯楽となっている。中でも、学生の応援団はテレビや小説、漫画の題材としても用いられ、ひとつの文化として生活に根付いている。そのような環境にあっても、高等学校で行われている応援団活動はひととき奇妙である。ボロボロの制服を着て、髪を長く伸ばすかもしくは坊主にし、言葉遣いは荒く、腕を組んで近寄りたがたい雰囲気である。彼らは一見すると秘密主義的で、学校生活でも常に応援団員としてふるまうことが求められるが、一方で普通の高校生や学生として日常生活を送っている側面もある。このような応援団は、自らを「バンカラストایل」の応援団であると自称することがある。バンカラとは、明治時代に旧制高等学校や大学で生まれた服装的な流行で、「ハイカラ」に対抗的な文化として誕生した。西洋風な「ハイカラ」に対して、「蜚カラ」は粗野な服装や言動を用い、外面よりも内面を磨くという思想を表現した。バンカラの文化は明治から昭和にかけて主に学生たちの間で流行したが、現在では応援団の形式の1つとしてのみ残っている。本研究では、高等学校で行われている活動のうち、バンカラストایلの応援団のみを対象としている。

バンカラストایلには明確な定義がなく、ある応援団員によると、「信念」を持っていればそれはバンカラであるという。

本研究では、応援団が言う「信念」とは何かを明らかにするため、学生応援団の歴史、基本用語、活動の様子、そして集団の性質を、主にフィールドワークを通じて調査した。

2. バンカラ応援団

フィールドワークで調査を行った X 高校の応援団の概要は、以下のようになっている。X 高校の年代史によると、X 高校は県内でも非常に長い歴史を持つ学校で、元応援団員によると、応援団も明治期にはすでに設立されていたという。部活動と勉学の両方に力を入れており、ほとんどの生徒が大学への進学を目指す。明治期に設立された当時はバンカラの応援ではなく、現在の形の原型ができたのは昭和 50 年代である。応援団の主な活動は、春に行われる応援歌練習と各部活動、主に野球部に対する応援活動などだ。このほか、入学式や体育祭のような行事の多くに応援団がかかわっている。

X 高校の応援団は、応援団長、副団長、特別役職、旗手長、鼓手長と平幹部で構成される。組織にはヒエラルキーが存在し、団長は、全校生徒を含む応援団の全体を統制する。副団長は団長を補佐し、幹部をまとめる。このヒエラルキーは厳格で、下の者は上の者に服従することが求められる。ただし、応援団の活動内容などは幹部全員による会議で決定され、話し合いはおおむね対等に行われる。応援団の活動は「伝統的に」決まっているが、実質的な活動内容は流動的である。応援団の活動は「伝統的に」決まっているが、実質的な活動内容は流動的である。

X 高校の応援団では、ヒエラルキーや応援団員の選出方法など数十年のうちに多少の変更が見られた部分はあったものの、組織の構成は概ね確立している。応援団の組織内での話し方や態度は、団員同士はほぼ対等だが、団員の手伝いの存在である「有志」と呼ばれる生徒と学年的な下級生は、上級の団員に絶対服従することが求められる。団員は「弊衣破帽」と呼ばれる破れた制服と制帽を基本とした特徴的な服装で、有志は、男女関係なく学ランを着用する。X 高校の弊衣破帽は、破れた制服と制帽に加え、裸足かげた、頭髮は坊主もしくは長髪、そして腰に手ぬぐいを下げるのが基本的な出で立ちである。授業や登下校のような日常生活でも常に応援団の服装をしていなければならない。また、団員の「威厳ある」装いを損なわないため、友人との関わり方などにも気を使う。このように、団員たちの日常生活には制約が伴う。服装は、応援団の最も分かりやすい特徴だが、彼らは「見た目は重要ではない」と考えている。弊衣破帽は、かつては着古した学ランを兄弟や近隣の住

民で融通しあうことで自然に破れたり汚れたりしたものを着ていたが、現在はわざと破き、砂にこすりつけるなどの方法で意図的に古い風合いを出すのが主流である。

応援に用いる特別な振り付けや発声方法は、先輩や元団員の卒業生から教えられる。振り付けはおおむね同じ形を保って受け継がれるが、代を重ねるごとに微妙に変化していく。振り付けの変容には、あとからもっともらしい意味が付与されることがあるが、団員の間でもその意味の解釈がそれぞれ異なり、共通理解があるわけではない。練習は毎日行われ、長期休暇には合宿もある。体力と精神の両面で非常に辛い練習だが、参加しない者は非難の的になる。応援団員の活動の大半は練習に費やされることから、厳しい練習は応援団にとって欠かせない重要な要素であると考えられる。

活動内容は、部活動への応援、入学式、体育祭など様々である。毎年必ず行われる活動と、代ごとに決められる活動がある。宣伝行列のような、直接的には応援と関係がない行事でも、応援団が主導するものがある。およその生徒たちは、応援団の活動に好意的である。そうでない生徒も、行事の際には反抗せず応援団の指揮に従う。このような生徒たちの協力的な態度が応援団の活動を支えている。また、応援団は入学式や開会式といった、本来の役割であるスポーツの試合の応援以外の行事にも主体的に関わる。これは、応援団の応援がそれだけで成立することを示している。

応援団への女子の参入は、応援団のきまりの変化のひとつとして受け入れられたが、卒業生の元応援団員の中には反対する者もいる。しかし、現役の応援団員が応援団を作っていくという原則に従い、現役団員たちの判断によって参入が受け入れられた。この決定の背景には、応援団員の深刻な人員不足があった。応援団は女子の受け入れのほか、幹部の部活動加入を認めることで、生徒たちの応援団への加入を促し、存続を図っている。応援団に加入する動機や応援活動に参加する意義について、団員たちに明確な共通理解は見られなかった。しかし、多くの団員が応援団の姿、「伝統」、応援活動そのもののいずれかに憧れを持ち、自分もそれに関わりたいという意味を持って参加していることが、アンケートやインタビューの結果からうかがえた。幹部は原則的に1-2年で幹部を引退する。短期間の活動で後輩団員に応援団のきまり、フリ、発声のような多くのことを教えなければならぬため、彼

らはできる限りの時間を共に過ごす。後輩団員は毎日の練習だけでなく、合宿、幹部室内での会話など、あらゆる活動で応援団について学ぶ。今回の調査で話を聞いた現役団員には直属の先輩がいなかったため、振り付けや発声、基本的なきまりなどを卒業生の元応援団員から教えられたが、部室内での幹部同士の会話のような日常的な交流の不足から、随所に知識の漏れが見られた。

これらのことから、応援団は、先輩から短期間のうちに教えられたことを、後輩団員が先輩からの信頼と厳しい毎日を乗り切ったという自信に基づいて引き継ぎ、足りないところは再解釈し、新たに再構築することで成り立っていると筆者は考察した。X 高校の応援団は、バンカラという様式を保つことで、時代によって流動的に形を変える「伝統」を積極的に容認している。

次に、宮城県の Y 高校で行った調査について述べる。応援団には、実質的に応援活動に携わるのは上記のような応援団員だけである一方で、全校生徒が応援団であって、日常的に活動している応援団員は代表者に過ぎないという建前がある。そのため、野球の応援のような特別な行事の際には、全生徒が応援団として動員され、応援に参加するのが慣例である。Y 高校では、そのような全校生徒が参加し、応援団が中心となって開催する学校行事の様子を調査した。具体的には、Y 高校とライバル校が毎年行う「定期戦」と、それに伴う「アピール行進」及び、夏季甲子園大会地域予選での応援団と生徒たちの様子を観察した。

これらの行事は、教諭の関与がほとんどなく、生徒たちは応援団員の指示によって行動する。「アピール行進」では、生徒たちが仮装をし、町中を練り歩く。応援団は、生徒たちの様子を見て、大声で掛け声をかけたり手を振り回したりなど興奮を煽る一方で、通行人に迷惑をかけないように列を乱す生徒たちに注意して回る。定期戦の当日も応援団が現場を仕切る。試合の流れと生徒の雰囲気を読み、応援歌の種類とエールの言葉、ヤジ、余興などの要素を組み合わせ、適切な応援をする。

3. 人類学的考察

応援団の性質を分析するためには、多角的な視点を持つことが必要である。ここでは、応援団の伝統と共同体としての性質、応援に用いる所作、儀礼的性質と、生徒下位文化の視点から捉えた応援団の機能、そしてプロスポーツの応援集団との相

違点について、それぞれ分析・考察する。

(1) 伝統

応援団員は、彼ら自身が実践する応援の所作や服装について、それらがとても「伝統的」であることを強調する。ここでいう「伝統」という言葉について、彼らの「伝統」が一貫しておらず、流動性のあるものであることが、先述のフィールドワークで明らかになっている。19世紀以降に現れた「伝統」の多くは、近年になって作り出されたものである(ホブズボウム 1992)。これを、ホブズボウムは「創り出された伝統」と呼称した。さらに、ホブズボウムの「創られた伝統」論を引用した山下(1996: 9)が指摘しているように、伝統文化は太古から連綿と伝わってきた本源的な実態ではなく、近代になって再構築されたものである。つまり、常に再解釈と再構築を繰り返す応援団の伝統も「創られた伝統」であると言える。ここで重要なのは、応援団の伝統を「創る」再解釈と再構築が非常に短いスパンで行われているということである。高校生の応援団として活動できる期間は1・2年と、限られている。他の伝統と比べて、担い手が伝統を実践できる期間が短いために、伝統の解釈に生じるズレが短期間で大きくなる。このズレは応援団OBが現役世代の指導に入ることによってある程度はカバーできると考えられるが、それだけでは不十分だ。

(2) 共同体

次に、共同体とは、過去からの伝統に対して一定の意義を見出す集団が、それ自体として再生産の機能を保持する場合に成立する(鈴木 2005: 138)。これを前期近代には、仕事、地縁などで否応なく縛り付けられてきた共同体から、後期近代において変化し、あらゆる帰属から解き放たれた個人は、あらゆることについて再帰的な自己決定をするようになった。これは、人々が「伝統に従うか」「共同体に帰属するか」という選択をもしなくてはならなくなったということである(鈴木 2005: 137)。これによって、共同体は「共同体に帰属したい」という個人の選択のあとでしか存在することができなくなった(バウマン 2001: 219)。後期近代においては、「参加したい」と思って共同体に所属している構成員をつなぎとめている、彼らが共有する歴史、習慣、言語、教育のような「留め具」が、取り外しが容易なジッパーのようなものになっている(バウマン 2001: 218)。バウマンは、このような個人になりたいという欲求に疲れた個人が、少しの間、共同体の一部になろうとしてできる後期近

代の特徴的な共同体を「カーニヴァル型」または「クローク型」の共同体と呼んだ(バウマン 2001: 258)。このようにして形成された共同体への構成員の感情は、個人的な選択の帰結から生じる限定的なものでしかない(鈴木 2005: 138)。そこで、後期近代の共同体から「共同性」への転換が起きる(鈴木 2005: 138)。共同体という一貫した形を維持することではなく、たとえ刹那的でも「つながりうること」を感じる、瞬発的な盛り上がりこそが集団への帰属感の源泉となっているのである(鈴木 2005: 138)。

この論を応援団で考えてみる。応援団員になる者は、多かれ少なかれ応援団の「伝統」に意義を見出し(もしくは強制的に意義を見出すよう迫られて)、それに参加したいという意思に基づいて参加する。応援団が結成され始めたのは、日本で文明開化まもなくの明治時代である。このころの日本では、人々は身分などの帰属から解放され、自由な気風が醸成されていた。特に、エリートたちが学ぶ旧制高等学校や大学では自由であることが大切にされた。これは、彼らが自由の中で特に「共同体に所属する」という選択をしたことに他ならない。応援団は、スポーツの試合という特定の状況で、カーニヴァル的な盛り up を演出する。応援団以外の生徒たちにとって、応援団の姿はカーニヴァル型の共同体であるように映るだろう。しかし、応援団員はカーニヴァル的な状況以外の日常でも常に応援団として振る舞う。また、応援団のつながりはバウマン(2001)ンがいうような取り外しが容易なジッパーではない。一度参加してしまったら2年間は応援団の組織に縛り付けられ、簡単に離脱することはできない。しかし一方で、応援団は立候補、つまり個人の選択によってのみ成立するという性質を持っている。

このことから、応援団は近代的な特徴を持つ共同体でありながら、後期近代的な共同性の特徴を併せ持つ集団であるということになる。応援団そのものは前期近代の共同体としての特徴が強いが、全校生徒の前での応援団は帰属性を瞬間的に爆発させる起爆剤の役割を果たす共同性を持つ集団である。つまり、応援団は学校全体の共同性を保つために存在する共同体だということになる。

(3)所作

次に、応援団が実際の応援のリードに用いる所作の特徴と役割を考察する。

応援団が実際に活躍する場合は、スポーツの試合、とりわけ野球の試合である。応

援団員は少人数で数十から数百にわたる観衆の意識を、試合や応援に向けさせなければならない。野球の試合は攻守の切り替えがあり、1 試合の時間が長いため、観客の集中力や興奮を維持することが難しい。これを克服し、観客の興奮を効果的にコントロールするために、応援団は「フリ」「発声」といくつかの道具を用いる。応援団は、応援に独特な所作を用いる。この所作をフリ、テク、カタ(以下、フリで統一)などと呼び、学校ごとに独自の進化を遂げているものの、「バンカラ応援団」を名乗る応援団は例外なくフリを持っている。また、身体の動きとしてはフリを用い、同時に特徴的な「発声」をする。発声の仕方もそれぞれの応援団で決められている。練習の多くは正確なフリと発声を習得するために行われる。また、応援団員によると、フリには扇や旗を用いる動きがあり、旗が翻る方向や扇の角度、扇を開く動作などひとつひとつに、応援団員の手腕が現れる。

このようなフリには、歌舞伎、舞踊、空手などのカタに似た動きが多く見られる。応援にこれらのカタが取り入れられた由来について、応援団員の多くは正確な理由を知らず、単に旧制高校や大学を真似た部分が大いなのではないかと考えていた。これはフリや発声が旧制高等学校や大学を真似たもので、その知識がほとんど口頭でしか伝えられてこなかったため、年月を経るごとに情報が曖昧になっているためだと考えられる。フリの動きの発祥について、『応援団・六旗の下に—東京六大学応援団連盟 36 年の歩み』(春田 1984)に興味深い記述がある。この書籍は、東京六大学応援団のいずれかの応援団に関わっていた人物が、応援団の思想、歴史などについて寄稿した文章をまとめたものである。この中で、東京大学応援部に所属していた中島清成が、彼が好きだった歌舞伎の動作を独自に取り入れたと述べている(春田 1984: 97)。

また、舞踊のカタについては、名のある舞踊家と親しかった相川という人物が、舞踊の「間」を取り入れたことから、現在の応援のフリの原型が出来上がったと述べられている(春田 1984: 97)。

このほかに、実際に取り入れた人物は明らかでないものの、空手のカタが用いられるようになった理由も書かれている。第 2 章で述べたように、かつてスポーツでは観客が暴徒化し、応援団同士の衝突が起きることも少なくなかった。このような暴力から自分たちの学校の学生を守るため、応援団員は屈強な身体を持っている必要があった。そこで、「ケンカに強い」空手部の学生が応援団員になることが多くな

った(春田 1984: 36)。このことから、応援のフリに空手のカタが取り入れられるようになったと考えられる。

このように、応援団は様々なカタを取り込み、独自のフリとして発展させた。また、自らの所属する学校の校章やシンボルマークを示すための旗、動きをより大きく見せるための扇、観客全体の音頭をとるための太鼓など、道具を効果的かつ最小限に用いている。これら要素からなる応援は、効果的に観客の感情をコントロールする。本田(1998: 81)は、様々なパフォーマンスを類型化した大橋と河合の論を引用し、アジアやアフリカの民族的パフォーマンスの中から、文化の伝播に関係なく共通に見られる要素を整理し、適応努力なしで快感を誘起する視覚・聴覚情報を「色彩の強いコントラスト、現職・金銀の使用、鏡などの反射素材の使用、人工的照明、誇張された造形、仮装・仮面、聴覚的情報については 16 ビート、高周波音、非常持続音、低周波衝撃波」とまとめている。また、動物行動学でいう「威嚇」を、人間に高い快感を誘起する表情と表現であるとしている(本田 1998: 82)。応援団は、これらのいくつかの特徴に当てはまる。まず、応援団のフリの動作は威嚇の行動に当てはまる。体をできるだけ大きく見せる動きや、大げさなしかめつつらがそれにあたる。また、大きな声も一般に動物の威嚇の動作として知られており、応援団の発声は威嚇の動作に類似していると言える。また、聴覚的な情報では、太鼓も観客の興奮を誘起する重要な要素である。和太鼓の音と振動が人間の「ゾクゾクする」感情を誘い、心地よいと感じさせることが工学研究によって明らかになっている(風井・山岡・松井・片寄 2010)。応援の際の太鼓は観客のすぐ近くで鳴らされ、大きな音だけではなく音の振動までもが観客に伝わる。これは上記で述べられている低周波衝撃波に当てはまる。応援団の服装は、日常生活ではほぼ目にすることがない特徴的なものであり、実際の応援の時には袴などを着用することから、仮装とは言えないまでも、観客に異様さを感じさせるには十分な容姿である。これらのことから、応援団のフリ及び発声は、観客の快感・興奮を誘起する特徴を多く含んでいることができる。

また、舞踊論の観点からも応援団のフリの機能を考察する。舞踊の演者とそれを見る観客には共振の関係がある(尼ヶ崎 1988: 10-11)。演者のパフォーマンスが肉体の限界を超えるものになったように見えるとき、観客は深い感銘を受け、感情が高ぶる。応援団のフリは、通常では不可能であると感じるほどの動きを含む。これを

見た観客は感動し、より感情を奮いたたせやすくなるのである。

(4)儀礼的性格

さらに、応援団が儀礼・様式化された性質を持つ理由を考察する。

儀礼的な行為とは、「コミュニケーションの役を果たす、文化的にコード化された行動(伝達の行動)」と本来の意味での「儀礼」である「合理的・技術的な行動とは異なり、オカルト的な力を喚起させる行動(呪術的行動)」で、儀式的な行動とは本来関係のない世俗的な行事も含めた文化の中の形式化された一連の行為のことである(リーチ 1984)。また、ムーアとマイヤーホフによると、集合的な行為としての儀礼は、①繰り返し②(意識的に)演ぜられる行為であること③特別な行動ないしスタイルを持つ行為であること④参加者、文化要素などの面で組織だった秩序があること⑤喚起的な表現形式(儀礼は人の心を引きつけ、参加意識を喚びさます)⑥集合的次元の6つの特性をあげている(梶原 1987: 213)。

これらの定義によれば、応援団は儀礼的な特徴を持った行為を行う集団であると言える。応援団は非合理的、「オカルト的」な方法で他者を鼓舞し、試合の勝利という具体的な目的を達成しようとする。応援は本来儀礼的な性質を持たないが、明らかに確立した形式をもち、世代を超えて行われる。また、応援は集合的な行為である。応援の所作は繰り返し行われ、応援をリードする応援団は意識的に応援の所作を演じる。彼らの所作は日常ではまず用いられない特殊な動きである。応援団は秩序立った動作を重んじる。このため、応援団以外の生徒にも一糸乱れぬ集団行動を要求している。応援団の応援によって、観客はより目の前の試合に集中するようになるから、彼らは観客の参加意識に訴えかけ、心を惹きつけているといえる。これらのことから、応援団は儀礼的な性質を強く持つ集団であることがわかる。

応援は、観客を集団的にひとつの行動に向かわせるという性質から、儀礼的な性質を持つ(杉本 1997; ミニョン 2002)。とはいえ、高校の応援団は応援だけでなく所作、組織構造、服装に至るまで、すべてが様式化されている。では、なぜ応援団は過剰なまでに様式化され、儀礼的な性質を持つようになったのだろうか。この問題について、グレーヴェ(2002)が玉木(1999)のスポーツにおける観客が持つ暴力性について述べた論を用いて考察している。

観客は、スポーツに絶対に必要な存在ではない。スポーツの第一義的な価値はスポーツであって、観客は主体的に応援に参加することはできないのである(玉木

1999: 45)。応援団は応援することを存在価値にしているが、そもそもの存在価値が第一義的なものではなく、スポーツに付随する第二義的なものでしかない。つまり、応援団の存在価値は本来的に希薄である。応援団は、自らの存在価値を応援以外の側面で補強する必要に迫られた(玉木 1999: 46)。そこで、応援団は厳しい規律で統制された集団、様式的な所作や服装を用いて、儀礼的な特徴を持つ集団になることで、価値を高めたのである(グレーヴェ 2002: 195)。

玉木の論は、別の観点からも考察できる。観客は、自分たちがスポーツに参加できない第二次的な存在でしかないことに観客は欲求不満を募らせる(玉木 1999: 44)。さらに、スポーツは一般的に観客の興奮を誘起する。これらの要因が重なると、観客の欲求不満と興奮は暴力として表出する。これは日本に限ったことではなく、スポーツにおいては頻繁に見られる事象である。観客が純粋に応援に意識を向けるとき、スポーツの試合に直接的な影響を与えることができないという事実が観客のフラストレーションを爆発させるのである。一方で、応援団はこの暴力性を儀礼に転化させることで欲求不満を解消したのだ。また、儀礼的な応援は秩序立った行動を観客に要求することで、観客全体の暴力性をおさえる役割も果たした。

最後に、高校の応援団とプロスポーツの応援集団を比較し、相違点を考察する。

まず、プロスポーツの応援集団と高校の応援団の双方ともが、スポーツの試合で観客に秩序を与えることを出発点にしていることに注目する。なぜ、スポーツに応援をリードし、秩序立たせる役割を持つ集団が必要だったのか。この問題については、スポーツにおける観客の暴力性の観点から考察されている。

まず、応援団の存在は、観客のいるスポーツを前提としていることを確認する。近代スポーツは、19世紀初頭、英国上流階級の余暇文化をもとに英国で誕生した(亀山 1988: 512)。近代スポーツは、明文化されたルールに基づくスポーツの専用空間である「スタジアム」をつくり、スタジアムには観客席が設けられた(大沼 2017: 98)。スタジアムは観客とプレイヤーを明確に分離し、「見る人」がいることを前提としたスポーツを確立した(大沼 2017: 98)。このように、近代スポーツは「やるスポーツ」と区別される、「見るスポーツ」または「スペクテータースポーツ」として成立し、社会の都市化とともに発達したのである(高橋 2011: 1)。近代スポーツは、前近代の荒々しく暴力的なフォークゲームとは異なり、明確なルールに基づいて行われ、秩序だった行動規範に制約されている(杉本 1999: 163)。これは、自由だった身体が制

約され、決められた範囲内で最大限のパフォーマンスを発揮するというものである。これはスポーツの専門家につながり、現在のスポーツ選手はトレーニングから食事まで、禁欲的な生活を強いられるようになった。このようなスポーツを観戦する者は、制約され、禁欲的であるがゆえに、むしろ欲求を煽られる。煽られた欲求は放置すると暴力として現れ、規制しても反動でさらに欲求を煽られる結果となる(杉本 1997: 21)。この欲求不満が、スポーツにおいて暴力として現れるのである。

近代になると、前近代までの人々がきわめて限られた範囲の狭い集団に基づき、内と外の区別をつけて外からの脅威に対抗するために結束していた「環境的紐帯」と呼ばれる社会的結合から、産業化、都市化とあいまって合理的な分業体制を促進する理性的な人間関係を要求する「機能的紐帯」への転換が起きた(菊 1997)。菊(1997: 232-233)によると、環境的紐帯の社会においては内と外の区別のために戦闘的な暴力が行われることが多かったため、暴力に対して寛容である傾向があった。しかし、都市の機能的紐帯では理性と強い自己統制が求められ、暴力が忌避されるようになった(菊 1997: 240)。しかし、機能的紐帯への転換によって暴力が完全に消失するわけではない。そこで、このような都市の閉塞感から脱却し、感情を爆発させ、ある程度の暴力を容認する場として、スポーツが行われるようになったのである。このように、近代スポーツには都市祝祭の一面がある。祝祭空間においては、ある程度の暴力、乱痴気騒ぎが認められ、伝統的な祭りにおける無礼講に見られるような無秩序に陥りやすくなる(杉本 1997: 22-23)。

このことからわかるように、近代スポーツの観客は常に暴力性を帯びている。そのため、スポーツのスタジアムでは観客の暴力を統制し、無秩序に陥ることを回避しなければならなかった。杉本(1997)は、プロスポーツの私設応援団の例をあげ、応援団が観客の興奮を鎮める装置になっていると述べている。私設応援団は、様々な応援の型や歌を用いて観客の応援を秩序づけ、応援を伝統的な祭りのような祝祭空間にする(杉本 1997: 17)。ここにおいて、応援団は人々を興奮に導く「煽る文化装置」として機能する。一方で、日本の私設応援団に特徴的な機能として、観客が祝祭空間で過度に興奮し危険な無秩序に陥ることを回避するために、「鎮める文化装置」が同時にはたらくのである(杉本 1997: 21)。興奮を鎮める方法として、祝祭空間で無秩序に秩序を与える方法として用いられる「儀礼化」の手法が取られる。応援団のリードに従って動く観衆は、自らの内面を規律するようになる。応援団は観

客の暴力性を儀礼として昇華していると言える。

しかし、高校の応援団のフリには、第2章で述べたように、観客(生徒たち)の興奮を誘起する要素が多数含まれている。これは、観客の属性の違いによるものだと考えられる。上記の研究において、杉本が対象にしているのは「スポーツファン」である。私設応援団の指揮に従って応援するのは、自発的にスタジアムに足を運び、私設応援団とともに応援できる席を選択した観客である。一方で、高校の応援団が指揮する生徒たちの中には、スポーツの試合に全く興味がなかったり、強制的にスタジアムに連れてこられたりした者もいる。このような生徒たちの応援に対するモチベーションは非常に低く、むしろ興奮を高めて意識を応援に向かわせる必要があったのではないかと考えられる。また、杉本は日本の近代化の過程ではスポーツの「見る身体性」による興奮を、ことごとく排除しているのではないかと述べている(杉本 1997: 7)。人々は、自己の身体図式をプレーヤーに投影し、身体的距離をせばめることによって興奮する(亀山 1990: 10)。これは、プレーヤーの動きから発せられる様々な情報を未処理のまま見て、「身体で見る」ことによって起こる熱狂的な興奮である(杉本 1997: 4-5)。しかし、近代教育ではあらゆる身体性を体育教育によって身につけさせてきた。つまり、未処理のままプレーヤーの動きを熱狂的に「見る」ことができなくなっているのではないか、というのである(杉本 1997: 7)。この論によれば、体育教育の只中にある高校生たちが、スポーツの試合を見ることによって感情を高揚させるのは難しいといえる。高校の応援団は観客である生徒たちの感情を意図的に昂らせ、熱のこもった応援をするための機能を持つ必要があったのだ。つまり、「鎮める装置」としての機能を強く持つプロスポーツの応援集団に対して、高校の応援団は「煽る装置」としての機能を持つと言える。

プロスポーツを熱狂的に応援するファンや私設応援団についての研究は、ミニヨン(2002)の欧州サッカーチームのサポーターに関する研究や、高橋(2011)の日本プロ野球における私設応援団活動に関する研究、また、ベガルタ仙台のサポーターを調査した本郷(2015)の研究などがある。ミニヨン(2002: 33)は、サッカーは、アンダーソン(1997)がいう社会的地位の違いや相互理解を妨げる障害を越えて、ある同一の集団の一員と認知し合う「想像の共同体」を實在たらしめる力を持つと述べた。高橋(2011)は、日本で最も人気のあるスペクテータースポーツである野球の集会的応援を対象として、野球ファンの応援行動をフィールドワークの手法で調査し、集

合的応援行動の儀礼性と社会的相互作用について研究を行った。本郷(2015)は、ミニョン(2002)の論を踏まえてサポーターの応援行動は呪術的な側面を持つことを指摘し、観客が娯楽としてサッカーを観戦する「消費者」としての性質と、応援の力でチームの勝敗に影響を及ぼすことができると考えている「行為者」としての性質を併せ持つ存在であると述べている。これらの研究に共通するのは、スポーツの試合があることが前提で、そこに集まったファンの応援行動が持つ性質について考察しているということである。近代スポーツはスペクテーターがいることを想定している(杉本 1997)。とはいえ、無観客試合が物足りなくはあっても成立する一方で、試合のないスタジアムにファンが集まって応援だけをするような、プレーヤー抜き「試合」は成立しないだろうということは想像がつく。玉木(1999: 45)がいうように、プロスポーツにおいて、応援する観客は第一義的な存在になることができないのである。

このようなプロスポーツの応援団と比較すると、高校の応援団は応援だけで成立する場面が多々ある。X 高校の高総体開会式でも、応援する相手がいない状態で応援合戦を行っていた。Y 高校でも、甲子園予選開会式に召集され、試合のない会場の雰囲気盛り上げた。体育祭や入学式では、応援団の指揮に合わせて校歌や応援歌を歌う。プロスポーツでは試合によって高められた感情を応援団が統制する一方で、高校の応援団は、観客＝生徒に応援させることによって、感情を高め、かつ統制する。これは、スポーツの試合の場だけでなく、愛校心を発揚させる入学式、高校生にとっての祝祭の場である体育祭や宣伝行列などでも発揮される。高校の応援団は、単にスポーツに付随して「応援する」だけの存在ではなく、応援という手段によって生徒の感情を統制し、様々な役割を果たす包括的な集団であるということができる。応援団はスポーツから独立し、単独で活動できる存在なのである。

(5)生徒文化

また、高等学校における応援団活動の性質を理解するうえで、教育学視点を欠かすことはできない。ここでは、応援団を社会教育学の「生徒文化」視点を交えて捉え、その特徴と機能を考察する。

「生徒文化」は「生徒下位文化」とも呼ばれる。学校の生徒たちによって形成される下位文化である。下位文化(サブカルチャー)とは、『社会学事典』によると「特

有の価値基準によって形成された文化で、その社会の支配的文化の中に飛び地のように存在するもの」と定義される(高田 2010: 337)。高田(2010)は、ここで定義した「下位文化」は、支配的社会に対して従属的な「下位文化」であって、支配的社会に対して対抗的な「対抗文化」とは区別される必要があると述べている。「下位文化」が支配的文化の一部を形成する従属的な文化である一方で、「対抗文化」は支配的文化の社会構造とは異なる社会構造を想定し、支配的文化と争うものであるからだ(高田 2010: 337)。生徒下位文化の文脈で捉えられる下位文化は、米川(1978: 185)の定義によると、①あらゆる社会に存在する普遍的なある傾向、②全体社会とは異なっている集団の規範体系、③全体社会に対抗する集団の内部に生じる規範、の3つに分類される。生徒下位文化の概念は、このうち②と③の要素が混じったものであると考えられる(米川 1978: 186)。これに高田の定義を当てはめて考えると、②は下位文化の要素を、③は対抗文化的な要素を強く持っていると言える。

他方で、生徒文化を青年文化の一部として捉える視点もある。青年文化は支配的社会に対して一見、反逆的に見えても、その反逆性を商業的に利用され、牙を抜かれて支配的社会の一部に取り込まれるか、その担い手たちが成人期に支配的社会に移行するまでのバリエーションとして存在することが多い(高田 2010: 828)。これを、高田によって定義された先述の下位文化と対抗文化の視点で捉えると、青年文化に対抗文化としての側面を認めつつ、支配的社会によってその対抗が骨抜きにされ、実質的には従属的な下位文化としての性質を有するようになるということである。つまり、青年文化には対抗文化と下位文化の特質が共存している(高田 2010: 828)。

以上のことから、生徒文化は青年文化の一部であることを前提に、米川(1978)と高田(2010)の論を合わせて、以下では生徒文化を「青年文化の一部であって、支配的社会とは異なった規範体系を持ち、対抗文化の特質を持つ集団を含む生徒集団に特有の価値思考と行動様式」と定義する。

生徒文化の機能は、米川(1978)によると、以下のようにまとめられる。生徒文化には、集団の成員への機能、学校組織との関連で見た集団レベルの機能、そして生徒数団と支配的社会との関連で果たす機能がある。成員への個人レベルでは、家族からの独立や、仲間集団といった準拠集団の移行途中にある不安定な青年期の生徒に心理的な安定を与え、自律を促す機能を持つ。ある生徒文化の集団に入る生徒は、

まずその集団の規範を内在化しようと試みる。これは人格変容などの社会化作用を伴い、生徒文化の重要な機能であると言える。学校組織との関連では、学校そのものが持つ社会化機能の促進、または阻害が挙げられる。また、学校秩序に対する生徒の集団的な反抗や、学校運営への生徒の積極的な関与を、学校側が生徒文化をうまく利用し、統制しやすくする機能もある。これは、生徒会を設置して生徒の学校運営への関与をある程度是認することなどが例に挙げられる。そして、支配的社会との関連では、支配的社会の規範に対置される新たな規範を生成し、発展させることで、新たなイデオロギーを生み出す機能が挙げられる。この機能は今日の高校ではほとんど見られないが、かつての旧制高等学校や大学の活動家による生徒文化でこの機能がしばしば見られた。

高校の応援団は、高校の中に存在する生徒文化のひとつとして捉えられる。応援団は支配的社会の構造から逸脱した対抗文化としての側面を強く持つ。これは、教諭の関与を基本的には許さず、学校の中で独自の組織形態をとっていることから明らかである。しかし一方で、応援団は学校が許容した範囲においてのみ活動することができ、彼らの逸脱は実質的に学校の統制化にある。学校への反抗と受け取れる弊衣破帽も、学校の定めた制服に手を加えたものであり、学校の規範の範疇から外れたものではないということに、支配的社会としての学校への従属と対抗の共存がわかりやすく現れている。また、学校は応援団が全校生徒を統制することを積極的に認め、統制機能をうまく利用して生徒が想定外の反抗をしないように、応援や宣伝行列などの行事を使って計画的に反抗心を発散させていると考えることもできる。彼らの「バンカラ」スタイルが、支配的社会への反抗心とみなされながらも、学校のブランディングに使われていることは、まさに「牙を抜かれて支配的社会の一部として取り込まれた」生徒文化であるということが出来るかもしれない。ここで見逃してはならないのは、応援団が支配的社会への部分的な従属を受け入れているということである。彼らは自分たちが学校のブランディングに使われることも、根本的には学校の統制下にあることもわかっている。その上で、学校から生徒たちをまとめ上げる実力を持った集団としてその価値を認められ、支配的社会である学校に対抗的な生徒文化を持つ集団としての地位を勝ち得たのである。

4. おわりに

以上のことから、応援団の性質を以下のようにまとめる。応援団の特徴は、大きく分けて3つある。つらい生活に耐えること、活動できる期間が短いこと、そして活動の動機と意義が曖昧であることだ。そして、応援団の応援の特徴は、生徒(観衆)の感情を統制する能力を持つこと、応援そのものが主体になりうることである。

応援団員は、毎日の厳しい練習に参加し、ときに理不尽な厳しい規律に従い、応援団員として日常生活を送り、高校生活の大半を応援団の活動に費やさなくてはならない。これらの活動が非常に「つらい」ことは、多くの応援団員が証言するとおりである。このようなつらい生活に耐え抜き、先輩団員から認められると、応援団幹部になることができる。先輩団員は、厳しい練習に耐え、応援団として日常生活を送る後輩の姿を見て、応援団を任せられるという信頼と確信を持つ。応援団員の信頼関係は、つらい生活に耐えることで成立する。先輩団員は、2年間以下の短い期間の中でできるだけのこと後輩に伝えようとする。応援団としての信頼関係を醸成するため、彼らは練習、合宿、日常生活など、できるだけ時間を共に過ごす。共に過ごす時間が長いことは、彼らの結びつきをより強くする。応援団の慣習や所作などは口伝で教えられるものが多い。そのため、後輩団員はわかりやすい可視的な部分から真似ていく。外見から真似るため、なぜそのようなことをするのかという理由の理解は二の次になる。理由が不明なところ、理解が不十分なところは、後輩団員が自分で解釈する。幹部を任せられた応援団員は、つらい練習に耐えて先輩団員に認められたという自信がある。そのため、自分たちの解釈や新たな付け足しが間違っているとは考えず、再解釈に基づいて構築した「バンカラ」を真実として扱う。彼らの活動の目標は、表向きには「応援によって勝利を呼び込むこと」だが、彼らはこれを心から信じているわけではない。実際のところ、応援団の活動に共通の意義や目的はなく、団員たちがそれぞれ自分で考えるしかない。つまり、応援団組織には成員を結びつける目的が存在しない。目的の代わりに彼らを結びつけているのが、「信念」である。

このようなことから、応援団の「信念」について以下の通り考察する。高校の応援団は短期間で入れ替わり、伝統は受け継いだ団員たちによって常に再解釈・再構築される。常に変化し続ける伝統は、ひとつに定まることはなく、流動的である。

応援団員の結びつきは長い時間を過ごすことで形成され、信頼はつらい日々を耐えたという共通の経験による。再解釈・再構築によって得た「バンカラ」は、時代に合わせた感覚を常に取り入れることができる。「バンカラ」の形は応援のスタイルにも直結し、時代に合った応援は、より生徒の感情をコントロールしやすくする。生徒たちを統制する優れた応援によって、応援団はスポーツの応援以外の様々な行事に参加している。応援団の応援は、応援の枠を超えて単独で成立するのである。団員たちは、これらの実際に生徒を統制する経験によって、厳しい練習と生活で得た自信と、創り出した自分たちの「バンカラ」を揺るぎないものにする。つまり、信念とは、辛い共同生活を耐え抜いて構築され、活動での経験を通じて強固になる「理想のバンカラ」を固く信じる心である。応援団は、流動的で実在しない「理想のバンカラ」を信念の実践によって実在に導く集団である。アンダーソン(1997)がいう「想像の共同体」のように、応援団は本来、実在しない想像上の存在であった。しかし、団員たちは信念の創出と実践によって強く結びつき、共同体を形成した。このことから、応援団は「信念の共同体」であるといえよう。

最後に、本研究の意義と今後の課題について述べる。応援団の性質を共同体理論と教育社会学的な「生徒文化」の観点から考察した。また、プロスポーツの応援集団と高校の応援団の相違点を示すことで、高校応援団の存在の独自性を明らかにした。高校応援団の性質をあらゆる側面から考察することで、応援団組織の複雑さを浮き彫りにしたという点で意義がある。本研究では、高校の応援団の組織形態と機能に焦点を当て、フィールドワークを中心として調査を行い、応援団員が大切にしているという「信念」とは何かについて考察してきた。2つの高校で行ったフィールドワーク調査で得られた資料は、この研究の大きな成果である。X 高校の応援団員のインタビューでは、組織の構造が明らかになった。これはすべての応援団に当てはまるものではない。応援団の特徴的な組織構造をより詳細に知るためには、他の学校でも調査を行い、共通点と相違点を比較することが必要である。

引用文献

尼ヶ崎彬

1988 『芸術としての身体—舞踊美学の前線』 東京：勁草書房。

アンダーソン、ベネディクト

1997 『想像の共同体』 白石さや訳、東京：NTT 出版。

バウマン、ジークムント

2001 『リキッド・モダニティ』 森田典正訳、東京：大月書店

グレーヴェ、グドゥルン

2002 「応援団について—キャンパス・ライフに不可欠の団体か奇妙な遺物か」 立命館言語文化研究 14(2): 187-197。

春田修

1984 『應援團・六旗の下に—東京六大学応援団連盟 36 年の歩み』 東京六大学応援団連盟 OB 会編、東京：ユーゴー。

ホブズボウム、エリック

1992 『創られた伝統』 前川啓治訳、東京：紀伊國屋。

本田郁子

1998 「日本のコミュニティ型伝統芸能にみる表現戦略」『日本文化の独自性—スポーツ文化論シリーズ⑨』 中村敏雄著、pp.81、東京：創文企画。

本郷萌佳

2015 「なぜサポーターは熱狂的に応援するのか—ベガルタ仙台のサポーターを事例に」 東北大学文学部卒業論文。

亀山佳明

1988 「スポーツ」『社会学事典』見田宗介・栗原彬・田中義久著、東京：弘文堂。

1990 「スタジアムの詩学—プロ野球を中心として」『スポーツの社会学』亀山佳明著、3-27、京都：世界思想社。

風井浩志、山岡晶、松井淑恵、片寄晴弘

2010 「腹部への振動刺激呈示による和太鼓音の主観的評価の向上—近赤外線分光法による脳イメージングと心理評定による検討」『日本感性工学会論文誌』9(4): 591-600。

梶原景昭

1987 「儀礼」『文化人類学事典』213-214、東京：弘文堂。

菊幸一

1997 「スポーツファンの暴力—スポーツファンの近代的身体」『スポーツファンの社会学』杉本厚夫著、京都：世界思想社。

リーチ、エドモンド

1984 『儀礼の象徴性』青木保編、東京：岩波書店。

ミニョン、パトリック

2002 『サッカーの^{パッション}情念—サポーターとフーリガン』堀田一陽訳、東京：社会評論社。

大沼義彦

2017 「スポーツ・スタジアム」『よくわかるスポーツ人類学』寒川恒夫著、東京：ミネルヴァ書房。

杉本厚夫

1997 「スポーツファンの興奮と鎮静—私設応援団の文化装置」『スポーツファンの社会学』杉本厚夫著、京都：世界思想社。

1999 「スポーツファンの文化」『スポーツ文化を学ぶ人のために』井上俊・亀山佳明著、京都：世界思想社。

鈴木謙介

2005 『カーニヴァル化する社会』東京：講談社。

高田昭彦

2010 「対抗文化運動」『社会学事典』日本社会学会社会学事典刊行委員会著、828-829、東京：丸善出版。

高橋豪仁

2011 『スポーツ応援文化の社会学』京都：世界思想社。

玉木正之

1999 『スポーツとは何か』東京：講談社。

山下晋司

1996 『観光人類学』東京：新曜社。

米川英樹

1978 「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』4: 183-208。